商店街をお届けします

橘出張商店街

商店街が住宅地へ「出張」した時、そこには懐かしくて、やさしい風景があらわれる。風のようにやってきて、楽しい笑い声を残して次の場所へ。それはまるでキャラバンのように様々な交流を生み出す。そこへ行けば、小さな町を楽しむ答えがきっと見つかる。

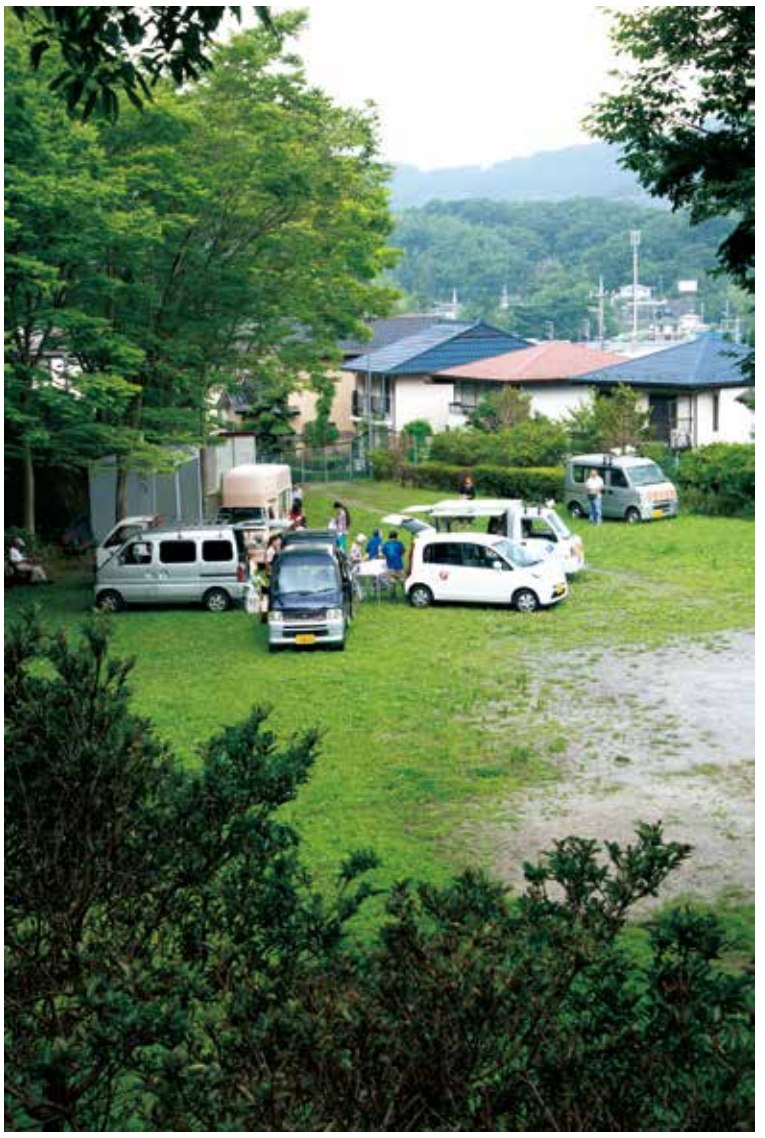
橘商工会の軽ワゴンが出張商店街到着のアナウンスを流す。「ト～プ～」と、お豆腐屋さんが懐かしい例のラッパを吹く。それぞれの移動販売車ではすばやく「開店」の準備が完了してすでに近所の家から集まってきたお客さんたちと、2週間ぶりの挨拶をかわしている。

これは橘の住宅団地で月に2回第2と第4日曜日に見られる光景である。日常生活に必要なお店たちが軽トラ、軽ワゴン、普通の軽自動車、業務用の販売スペースのある車など、それぞれ様々な車種に乗って何台も集まり、一緒に売りにきてくれる。その名も「出張商店街」。名前はひねりゼロだが、なんとも懐かしいようなウキウキするような響きである。

出張商店街には八百屋さん、魚屋さん、パン屋さん、お米屋さん（灯油も配達）、ペット用品、それにお豆腐屋さんまでそろっている。普段はお肉屋さんなどさらに2店舗ほど多いそうだ。今日は、地元の神社のお祭りがあり、自治会の役員もしているお肉屋さんはそっちへ出かけてしまっている。お客さんから「今日はお肉屋さんは？」と聞かれるたびに「今日は白髭神社のお祭りに行ってるよ」なんて返される会話も、まさに商店街的だ。

販売場所は7カ所。8時20分からスタートし、利用客の多い少ないでそれぞれ販売時間を20分と30分にわけて行い、時間になったら片付けてすぐに移動を繰り返し、12時までにはすべて回り終える。

品揃えの方は、例えば八百屋さんでは新鮮なキュウリが5、6本入って50円、国産のニンニクが150円など、スーパーで買うよりも安いし、なにより商品の半分は自家栽培ものという贅沢さ。魚屋さんもいきなり大間の本マグロがあったり、パン屋さんはこだわりの天然酵母だったり、豆腐屋さんは手づくりにこだわり、湯葉刺しやおからで作った焼きドーナッツなんかもあったり、お肉屋さんには大人気のあげたて一口サイズのコロッケやメンチカツがあったりと、まるで小さなデパ地下のよう。これで出張までしてくれるなんて、なんかずるい。うちの近所にも来てくれたらいいのになんて、つい思ってしまう。

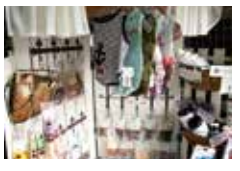


草いきれのグラウンドに、忽然とあらわれた青空出張商店街。緑に囲まれ、まるで物語のよう。

「最初は、うまくいくのか全くわかりませんでした。だから、住民にアンケートをとったんです。」

出張商店街を取りまとめている周東さんが教えてくれた。

橘団地の一般住宅と共同住宅は、当時まだ足柄下郡だった橘町が小田原と合併して小田原市になった昭和46年にできた。昭和56年頃にはさつきが丘団地が完成し、その他に若葉台団地や湘南橘台団地と、5団地あわせると、その世帯数は約700世帯にのぼったそうだ。それでも大規模なスーパーマーケットが出店するほどの商圏とはならず、唯一あった共同店舗も、その後近隣の中里や二宮に出来た大規模な商業施設におされてなくなってしまった。これはつまり、当時の橘の

懐かしいお豆腐屋さんのラッパも、出張商店街の到着を知らせる。

出張する商店街の風景